近代日本の発達概念における身体論の検討

前　田　晶　子

(2007年10月23日　受理)

The Human Body in the Concept of Development in Modern Japan

MAEDA　Akiko

要約：本研究は、日本における発達論の形成過程において、身体論がどのように位置付いていたのかを検討したものである。第一に、近世から近代への移行期において、人間形成観における転換の質を分析するために、developmentの翻訳語である「発生」と「発達」の訳語分化の過程に着目し、そこでの身体論上の問題を分析した。第二に、1930年代に行われた発達論争を取り上げ、ここでの議論を「発生―発達」問題として整理し、検討した。とくに、論者の一人である山下徳治に着目して、彼の発生論的発達論について論じた。これらの作業を通して、近代日本の発達論の質を検討するに当たっての、身体論的観点からの分析枠組みを提示した。

キーワード： 発達、発生、身体論、発達論争、山下徳治

1　発達論における身体論的契機

本研究は、心理学や教育学などの領域において浮上している「発達」概念への疑義[1]という状況に対して、この概念の歴史的形成過程の分析を通して、現代の子どもをとらえる視点を提示したいという意図の下にこれまで筆者が行ってきた研究の一部をなしている。発達論批判は、発達概念が理念的には子どもの個性に即した教育の前提として理解されてきたのに対して、現実にはこの概念の背後に国家的･経済的要請が横たわっている[2]、あるいは発達の道筋が規格化されてきたことがこの概念に期待された役割とは逆の結果をもたらしているとして、この概念のアイロニックな歴史的帰結を指摘している[3]。しかし、これらの議論において、近代日本における発達思想の形成が、近世以前の人間形成像とどのように連続・断絶しながら展開したのかといった、この概念の中身に踏み込んだ考察は十分なものとはなっていないと思われる。そのため、現在でも教育学の基礎概念として不動の地位を保っているこの概念への、本質的な批判、あるいは乗り越えの契機の提示にまでは至っていないのではないだろうか。そこで、この思想が近代日本においてどのような概念として登場し、また教育（学）の場でいかなる議論を経て、教育的価値として了解されてきたのかを明らかに

する必要があると思われるのである。

では、どのような視点でこの概念に切り込めば、内在的な批判と新たな契機を見出すことが可能になるのであろうか。筆者は、これまで、西洋社会における発達概念の日本語への翻訳過程に着目することで、幕末から明治初期にかけての日本人が発達概念をどのように理解してきたのか、という点に注目してきた。その中で明らかとなったのは、この概念の対訳語が当初は「発達」ではなかったという点であった。幕末の蘭医学、中でも小児科領域において初めて日本に西洋の発達概念が導入された際、蘭語ontwikkelingの訳語として当てられたのは「発生」の語であった。医学の中でも新しい領域であったこの分野では、この語が子どもの身体変化のメカニズムを指すものとして重要視され、子どもの疾病を扱う際には「発生」の過程を踏まえなければならないことが指摘されたのである[4]。ところが、その後、この訳語は主に生物学や生理学において定着をみるが、子ども研究を含めた他の領域では用いられることはなく、代わってある段階から「発達」が訳語として選択されることが一般的となる。それと同時に、この語の適応範囲が広がり、単に生物学的な意味での身体の諸器官の変化を示すのみならず、人間の精神的・認知的な側面における変化や、ひいては社会や国家の発展の過程を示すものとして用いられるようになるのである[5]。この訳語分化の過程に注目することで、developmentの日本的な受容の中身を明らかにすることができるのではないだろうか、というのが本研究の仮説である。

ところで、「発生」と「発達」の訳語選択は、語彙論上の問題を超えて、どのようなdevelopment理解の差を生み出すのだろうか。前者が、医者による身体的な成長のメカニズムに対して用いられた語であるということ、また生物学的領域の専門用語として定着を見たということを考えれば、対象を生理学的な身体に限定するのか、それとも必ずしも身体をその対象に含まない場合にも用いるのか、といったいわば身体論の有無としてとらえることができるかもしれない。いいかえれば、子どもの成長過程に「発達」の語が用いられるようになる近世から近代への過程において、「発生」的な理解、すなわち身体論的な契機がどのように展開したのかを確認していく必要があると思われる。そのことが、単なる訳語の違いをこえた発達認識の中身への接近につながると考えられよう。

ところで、身体論は、さまざまな領域において注目を集めるようになって久しい。たとえば身体の歴史性について、18世紀の婦人病について記した文献をもとに論じたバーバラ・ドゥーデンの研究は、女性史研究領域の代表的なものであるといえる[6]。このような身体への着目は、たとえば人間の「自然性」は歴史的に構成されたものであるという「セックス／ジェンダー二元論」への疑問視――セックスもまた歴史・文化的文脈の中にある――などを生み出している[7]。他にも、身体性そのものへの着目を企図するものがある。古典的なものとしてはメルロ・ポンティの現象学における身体論が挙げられよう[8]。ここには身体に注目することで既存の価値を相対化し、人間の多様なありように注目する志向性がみられる。一方での身体の歴史的構築性の指摘と、他方にみられる身体性への注目は、一見逆の方向を向いているようにみえるが（身体への「疑い」と「期待」）、「近代とはなにか」という問いを前提としている点では、対をなしているようにもみうけられる。このような動向を

ふまえつつ、以下では、近代日本における人間の成長過程の捉え方の中に、身体論的契機が読み取れるかどうか、すなわち発達論の中に発達概念の近代性をとらえ返す視点が伏在しているのかどうかの分析を試みたい。その作業を通して、発達論が現在直面している課題に接近したいと考える。

以下では、「発生」と「発達」の展開について、まずは語彙論的な検討を行い、続いて西洋における両概念の関係を参照したあと、日本において発達概念が本格的に論議されたいわゆる「発達論争」に着目して、そこでの議論を「発生－発達」問題として整理・検討していきたい。

2　辞書における対訳関係の成立

まず、辞書の検討を通して、いつごろ「発達」がdevelopmentの対訳として成立したのか、「発生」との関係はどうか、という点について検討を加えたい。

最初に、和英辞書上で「発達」という語が始めて登場したと考えられている『和英語林集成』[9]をみてみたい。表１のように、「和英の部」では、「発達」は「上達する improve」「エキスパートになる expert」「熟達する skillful」という意味に解されている。このような理解は、developmentのもともとの意味である「内なるものが解かれて滞りなく広がる」といったものとは異なり、技術上の熟練を指している。このことは、発達とdevelopmentの対訳関係が語彙論上は容易に成立しにくいことを示唆している。ちなみに、「英和の部」におけるdevelopの項では、「Arawasu」「Hiraku」などこの語の古い用法がみられるが、３版になると、「Kaihatsu」という現代的表現が登場している。また同版で「発育」の項にdevelopmentが登場しているものの、やはり発達とdevelopmentとの対訳関係は成立していたとはいえないだろう。

表１　『和英語林集成』における「develop(ment)」「発達」の訳出

	初版(1867)	再版(1872)	3版(1886)
和英の部	HATSZ-DATSZ,-szru,ハツダツ ,發達 , To improve. Kenjutsz ni-, improve in fencing. Gakumon ni -. Syn. SHODATSZ SZRU, JODZ NI NARU.	HATSU-DATSU, ハツダツ,發達,-suru, to improve, to become expert or skillful. Kenjutsu ni-, improve in fencing. Gakumon ni -. Syn. SHODATSU SURU, JODZU NI NARU.	HATSUDATSU ハツダツ 發達 -suru, to improve; to become expert or skillful: Kenjutsu ni-, improve in fencing; Gaku mon ni -. Syn. SHODATSU SURU, JOZU NI NARU.
			HATSU-IKU ハツイク 發育(sodachi)n. Growth; development.
英和の部	DEVELOPE,Arawasz; toku.	DEVELOP, t.v. Arawasu, akasu, toku. (i.v.) Hiraku.	DEVELOP, t.v. Arawasu, akasu, toku. (i.v.) Hiraku.
			DEVELOPMENT, n.Kaihatsu, hirake, araware.

次に、同時代の他の辞書類に目を向けよう。ここに取り上げるのは静岡県立中央図書館葵文庫および京都大学付属図書館所蔵の蘭和、英和辞書である。これらの辞書におけるdevelopmentと

表２　明治前期の辞書類における「development」「growth」の訳出傾向

No.	書名	発行年	著者・編者	development (ontwikkeling)	発達	growth（groei）	書名	成長
1	波留麻和解（ハルマ和解）	1796	稲村三伯 編	蘭語／日本語	ontwinden, w.w.	巻ヲ解ク	groei, z.m.	育ツ、息エル
2	譯鍵	1810	藤林泰助（普山）編	蘭語／日本語	ontwinden.	解巻。説譯。	Groei	長育。肥大。
3	道富法爾馬（ズーフハルマ）	1833 (1816)	ヘンドリック・ヅーフ 他	蘭語／日本語	—	—	groei, z .m. groeÿing,	成長又芽だち
4	改正增補譯鍵	1857	藤林泰助（普山）撰、広田憲寛　修正増補	蘭語／日本語	ontwinden, w.w.	解ク。顕ハス。和解シテ知ラスル。	Groei.z.m.	長育。肥大。芽ダチ。
5	英和對譯袖珍辭書	1862	堀達之助 編	英語／日本語	Develop-ed-ing,v.a.	解ク、明カス	Growth,	成長、実リ物、根元、成行キ
6	改正增補英和對譯袖珍辭書（再販第２刷）	1867 (1866)	堀達之助 編、堀越亀之助 改訂	英語／日本語	Develop-ed-ing,v.a.	解ク、明カス	Growth,	成長、実リ物、增長、進ミ
7	和譯英辭書	1869	前田献吉（正穀）、高橋新吉（良昭）編	英語／日本語	Develop-ed-ing,v.a.	解ク、明カス	Growth,n.	成長。實リ物。增長。進ミ
8	大正增補和譯英辭林	1871	前田正穀（献吉）、高橋良昭（新吉）編	英語／日本語	De-vĕl'op-ment,s.	解ク丁。明カス丁	Grōwth,s.	成長。實リ物。增長。進
9	英和對譯辭書	1872	荒井郁之助 編	英語／日本語	De-vĕl'op-ment,s.	解ク丁。明カス丁	Grōwth,s	成長。實リ物。增長。進
10	附音挿図圖英和字彙	1873	柴田昌吉、子安峻 同著	英語／日本語	Dēvelopment(de-vel'-up-ment),n.	表明。發開。發覺	Grow(grō),vi.;Grew, pret. ;Grown, pp.; Growing,ppr.	成長スル。生ズル。進ム。增ス。延ル。成ル。移ル。太ル。届ク。脹レル
11	英和掌中字典	1873	青木輔清 編	英語／日本語	Development,s.	ミアラハス丁〇ヒロゲル丁	Growth,s.	セイチヨウ〇セイジン
12	增補訂正英和字彙	1882 (1873)	柴田昌吉、子安峻 同著	英語／日本語	Development (dē-vel'up-ment),n.	表明。發開。發達。開達。啓發。發覚。發育。亢進	Growth(grōth),n.	成長。發達。生産。産物。增殖。前進
13	英和雙解字典	1886 (1885)	P.A.ナットル 原著、棚橋一郎 訳	英語／日本語	Devel'opment,s. disclosure; an unfolding	表明。露出。發開。發達。開達。啓發。發覚。發育。亢進	Growth,s.vegetation; increase of stature	增殖。成長。發達。生産。産物。前進
14	訂正增補英和對譯大辭彙	1886	前田元敏 纂述 兼訂正増補	英語／日本語	De-vĕl'op-ment,n.	表明。發開。發覚	Grōwth,n	成長、生産、産物、增殖、前進
15	英和新國民大辭書	1888	高橋東一 纂訳	英語／日本語	Development,de-vel'-op-ment,s.	表明。露出。發開。發達。開達。啓開。發覚、發育、元進	—	—
16	新譯無雙英和辭書	1890	棚橋一郎 編	英語／日本語	Devĕl'opment,n.	表明、發開、發覚	Grōwth,n.	成長、生産、産物、增殖、前進
17	熟語本位英和中辞典	1915	齊藤秀三郎 著	英語／日本語	De-vel'opment（ディヴェロプメント）	【名】發達、發育、開發、發展、發現。❷〔寫眞〕現像。	Grōwth（グローゥ㋡）	【抽名】生長、成育、發育、發達。（より）增進 ❷（穀物類などを）作る事。

growthの項を整理したものが表2である。

この表からは、「解く、明かす」といったdevelopmentの古い用法を示す訳語から、1880年を境として「發達」「發開」「發育」などの語に転換している明らかな傾向を読み取ることができる。表中のNo.１～９までの辞書群は、蘭学から英学への転換期にあたるが、訳語上の大差はなく、「解（解）く」という訳で定着している。ところが、No.10以降のものをみると、二字熟語が用いられるようになり、語彙数も増加している。

中でも注目されるのが、柴田昌吉[10]と子安峻[11]による『英和字彙』である。1873年版『附音挿図英和字彙』では、developmentは「表明。發開。發覺」とされているが、1882年版『增補訂正英和字彙』（第二版）になると、これに「發達。開達。啓發。發育。亢進」の語が加わり、訳語の種類が格段に増えている。この第二版が、辞書上でdevelopmentと発達が対応する最も早い例であると思われる。これ以降の辞書『英和雙解字典』『英和新國民大辭書』『新譯無雙英和辭書』にも「発達」が登場しているが、これらはすべて『英和字彙』第二版を参照して作成したものとされている[12]。このように、「expert」「skilfull」（『和英語林集成』）といった熟達を示す発達の語が、「Arawasu」「Hiraku」という意味のdevelopmentと対応する道が開けつつあったと考えられるのである。

また、興味深いことに、growthの訳語においても、developmentとの連関的な変化が見られることが指摘できる。growthの項では『增補訂正英和字彙』（第二版）において初めて訳語として「發達」が登場し、「前進」「生産」などの語とともにそれ以降の辞書に影響を与えている。田中昌人は、18世紀の相学を検討する中で成人男性の立身出世に対して「發達」の語が多用されていることを明らかにしているが、その際に子どもに対して用いられる「成長」とは異なる意味を持つ語として用いられてきたことを指摘している[13]。とすれば、日本人にとって成人男性の熟練を示す語として使用されてきた「発達」がdevelopmentおよびgrowthに対応するということは、柴田や子安の翻訳作業が単なる語のマッチングという段階を超えて、語の意味変容をも意図したものであったということを示していると考えられる。

しかし、「成長」と「発達」をつなげる試みは、容易に浸透したとは考えにくい。たとえば、『英和字彙』は、その後、初版のみ増刷が行われ、1887年の第三版も初版に戻しての改訂版とされている。なぜ、第二版は採用されなかったのか、developmentの項から「発達」が削除されたか否かは今後の調査課題であるが、少なくとも第二版が英和辞書史上の一画期をなすものとなったとは言い切れない。むしろ、初発の試みとして限定的に位置づけられるのみである。

かつて筆者が調査した同時代の育児書においても、身体の変化に対して「成長」を、精神の変化に対して「発達」の語を使い分けるという傾向を読み取ることができた[14]。ここから、次のことが想定されるだろう。まず、「発達」は当初からdevelopmentの対訳語として登場したのではなく、「熟達」という文脈で用いられていたのであり、その後にdevelopmentの対訳語として採用されるようになるものの、ただちに人間の総合的な変化の過程をとらえる語として定着したというよりは、精神面（あるいは技術面）に限定したものとして理解されたということである。そこに、１で述べた

身体論的契機を読み取ることは難しそうである。

では、蘭医学のなかで最初にdevelopmentの翻訳語として採用された「発生」はどのように辞書上に表れているのだろうか。表２にあるように、これらの辞書には、「発生」はdevelopmentおよびgrowthの訳語としては登場していない。また、『和英語林集成』和英の部においても、「発生」の語が項として挙がっていない。そこで、今度はgeneticについて各辞書を検討したところ、多くの辞書で独立した項として掲載されていなかった。発生学（genetics）自体が未成立だったことを考えれば、このような結果は当然のようにも思われる。数少ない例としては、『増補訂正英和字彙』（第二版）と『英和新國民大辭書』において、共に「Genetic 原由ノ、来歴ノ」とされており、訳語として「発生」は登場していない。一方、Genesisは多くの辞書で登場しているが、「創世記」「起源」といった訳語のみで、ここでも「発生」の訳は見当たらなかった。従って、発生とdevelopmentをつなぐ方向性は、辞書上では見出すことはできなかったのである。

なぜ、辞書における発達とdevelopmentの対応過程において、医学でみられた「発生」の痕跡を探すことができないのだろうか。このことは、日本の発達概念の形成史における身体論の脆弱性をただちに示すことになるのだろうか。次の節では、この点に関連して、西洋における発達概念の問題に触れたい。

３　西洋における発達概念の問題　――発達、開発、発生をめぐって――

西洋社会において、developmentはどのような語として展開してきたのだろうか。表２の中でいまひとつ注目すべきは、自動詞「発達」とともに登場している他動詞「開発」という訳語である。この関係について示唆的な指摘を行っているのは、Oxford English Dictionary（OED）を批判的に乗り越えようとしたレイモンド・ウィリアムズの語彙研究である[15]。彼の研究に即して、西洋におけるdevelopmentの意味内容についてみていきたい。

developmentは、フランス語developperを語源としており、英語にこの語が登場したのは17世紀になってからである。その当時は、「開く unfold」や「解くunroll」、すなわち「包み込まれたものが開かれる」という意味をもって用いられていた。この点は、OEDに示されているとおりであり、先にみた表２の辞書群のうち古いものに登場する訳語と同じ内容である。

ところが、ウィリアムズが注目するのは、18世紀になってこの語が普及するなかで、人間の精神的能力の「開発」という意味が含まれるようになったという点である。あわせて、developmentの意味変化が決定的となったのは、進化論との関連であったことは周知の通りである。さらに19世紀には、国家の「発達の過程」という表現が登場し、近代国家の一つの方向性として、この語が自然科学領域を超えて適応されたのである。

ウィリアムズがもっとも強調するのは、産業との関わりでdevelopmentが用いられる場合、諸国家がdeveloped とunderdevelopedに分類され、前者が後者を保護する、あるいは後者は前者を追いかけるという意味で「発展途上国」と表現される関係が生まれ、国家の目指すべき目標が一元化されたという点である。

彼の指摘で興味深いのは、次の点である。この概念は、工業化の進展に伴って「先進国（developed）―発展途上国（underdeveloped）」という関係をもたらすようになるのだが、そのような二分法が発達心理学における発達概念に陰に陽に下支えされているというのである。それはなによりも、underdeveloped（低開発／発達不全）という言い方に象徴されているという。そして、この相似性において、内部からの「発達」と外部からの「開発」という自動詞と他動詞の目的を一致したものとしてとらえるまなざしが形成される。すなわち、先進国による発展途上国の開発が、後者の発達の過程と同義とされるのである。したがって、この発達と開発の相互浸透が、世界の国々の経済的・政治的諸関係の複雑さを曖昧化させ、諸国が一元的価値のもとに配列されてしまうというのである。

では、「発達」と「発生」の関係はどうか。ウィリアムズは、「発生genetic」の意味の変化について次のような興味深い指摘を行っている。この語は、ラテン語やギリシャ語のgenesisが語源であり、英語に入ってきたのは19世紀になってからであるという。この点でdevelopmentよりも新しい概念であるといえる。ウィリアムズは、この語には二つの意味があり、それらはよりポピュラーな用法としてのダーウィン的な進化論の文脈で用いられる「発生」と、より広い意味で用いられた「発達」である。前者は、19世紀初頭に定着をみたが、後者の方は逆に使用されなくなったという。ウィリアムズは次のように説明している。

> 「発達」という古くからあるより広い意味のほうは、たとえば『発達心理学genetic psychology』（1909）というようにこの時点（19世紀初頭―引用者）でもまだ生きていたが、今では生物学的な発生論には触れない「発達心理学developmental psychology」のほうが使われることが多い。（中略）しかし、英語に残っている用法に加えて、翻訳書、とりわけフランス語からの翻訳の中では、通常geneticは形成formationや発達developmentという意味でも散見される。（中略）翻訳された場合、geneticはしばしば誤訳されるか、生物学的な発生学とあいまいな形でつなげられてしまっていることがありうる。[16]

彼のいうところは、geneticはもともと「発達」という意味で一般的に用いられていたのであるが、生物学において使われる遺伝的な意味での「発生」が主流となり、前者の用法はフランス語に残るのみである、ということである。もし、フランス語圏を除いて、西洋においてもgeneticがdevelopmentと断絶していったのであるとすれば、日本語における発生と発達の訳語分化問題と同質とはいえないものの、西洋においても発達概念の発生論的視点の後退（あるいはgeneticの矮小化）が指摘できるように思われる。この点について、ウィリアムズは明言しておらず、またgeneticの二用法の相互関連についての説明もしていない。ただし、両概念の断絶がdevelopmentの意味変容と関係しているのではないかというひとつの仮説を提出しているものと考えられる。

いうまでもなく、発達論は進化論の影響を直接的に受けて展開されたもので、生物の起源をめぐる論争にそのルーツがある。森田尚人は、人間の起源を説明する際に目的論的な説明から脱せなかった17、8世紀の「前成説―後成説」論争の段階から、機械論的な説明が可能になった進化論的発達観の登場の過程を明らかにしている[17]。つまり、発達論の底流には、生物学的な起源の解明を通して、人間の目的論的な理解を問い直すというきわめて反省的な志向性があったと考えられるのである。

しかし、上述のように、日本語では、「発生」と「発達」の訳語分化という展開の中で、そのような方向性は閉ざされてしまったようにみえるし、西洋でもgeneticとdevelopmentの切り離しがみられたことになる。とすれば、発達論における発生論的視点、言い換えれば身体そのもののメカニズムに即することで人間形成における社会的前提を問い直す視点（身体論的契機）が曖昧になっているのではないか、ということが疑問として浮上するのである。

3　「発達論争」における山下徳治の問題提起

（1）「発生―発達」問題の展開

筆者がこれまで述べてきた「発生―発達」問題を日本において正面から論じたものとして、1934年に『教材と児童学研究』誌上で行われた論争を取り上げることができる。誌の主催者である山下徳治に対して城戸幡太郎、波多野完治、留岡清男らが批判するという構図のこの論争は、児童学の対象としての児童の把握をめぐって、それが「発達するもの」なのか、それとも「発達されるもの」なのかという問題として整理されている[18]。これまでの研究では、山下のとる前者の立場が社会や生活の問題を対象化することができず、子どもの発達を自明の前提とし、その内容を歴史・文化から抽象化してしまう弱点を抱えるという評価がなされている[19]。逆に、社会や生活から子どもの具体的な発達をとらえる後者の立場が注目を集めてきた。すなわち、この論争を巡っては、発達における「固体―社会」問題として整理され、位置づけられてきた経緯があるのである。

しかし、本研究では、近代日本の発達論史上、初めて発達の中身が吟味されたという点で大きな意味をもつこの論争を、これまで検討してきた「発生―発達」問題として、即ち発達論における身体論的契機の有無という観点から再検討したいと考える。結論を先取りしていえば、これまで論争の敗者として考えられてきた山下の、子どもを「発達するもの」とみるの主張のなかに、発生論的な視点があったのではないか、さらにそれが身体論的に社会や生活上の問題を乗り越える契機をもったのではないか、という仮説を検証してみたい。

（2）山下の経歴

山下徳治（1892－1965）は、鹿児島県出身の小学校教員で、同郷の小原国芳の仲介で上京し、1920年に成城小学校訓導となっている。リベラリストであり、ペスタロッチに傾倒し、またドイツ留学中はナトルプら新カント派に学び、またデューイに感銘を受け、さらにソヴィエトを訪問してのちに『新興ロシアの教育』（1929）を記し、帰国してからは新興教育研究所[20]の所長を務めた人物として知られている。彼の変化に富む軌跡は、そのまま日本の民間教育運動の歴史と重なるため、これまでもその運動史上の位置づけについて検討されてきた[21]。

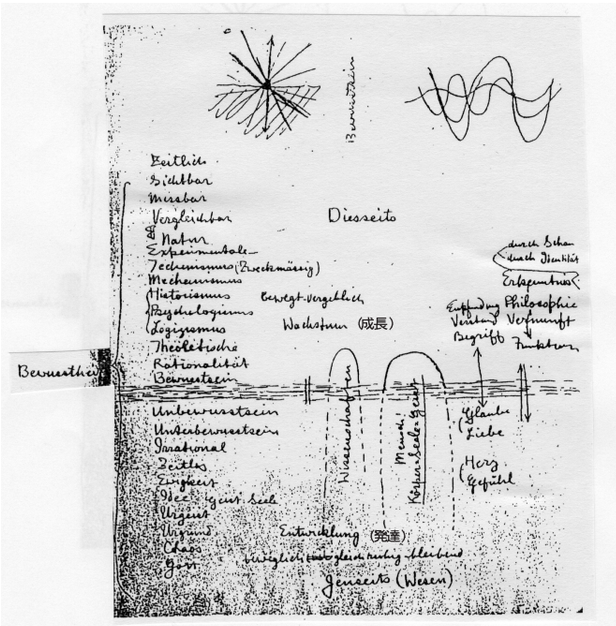
その中で、山下がそもそも子ども研究において発生論的な観点に関心があったといういくつかの指摘がある。井野川潔は、彼が地理学、とりわけ海洋学（オヂノロジー）に興味を持っていたと述べており、それをもとに教育学を考えようとしていたと指摘している。そのために彼はオーストラリア行きを希望するのであるが、政治情勢から結局は実現していない[22]。今後、詳細な検討が必要であるが、このような地理学への関心は、彼の、子どもの発達を広く人類史の中でとらえようとする傾向とパラレルであるように思われる。また、内島貞雄によると、山下にはもともと発生論的児童研究への関心があり、成城小学校時代に「人類の文化発達史の研究」を提起するなどして、その成果をもってドイツに渡ったという[23]。これらが彼をして人間を生物としてとらえるところから出発させ、児童を「発達するもの」として、人間の自発的な自己形成力を志向する傾向を準備したのかもしれない。

また、先にも触れたように、山下はペスタロッチを高く評価していた。それは、とりわけペスタロッチが人間の存在を「感性と思惟とを含むところの、而かも自発的なる発展的存在」[24]としてとらえた点に対してであった。「彼は社会及び個人の発生論的意義と有機的関係を発見した。けれども社会の歴史性を客観的に認識するに至らなかつた。」[25]とペスタロッチの時代的制約を指摘しつつも、その発生論的見方を評価している。そして、彼の教育論のうえに歴史的観点を付け加えたものが、まさしく彼の構想する新興教育論であったと考えられる。ちなみに、山下のマルクス主義受容については、三木清を介してのものであったのではないかとの指摘がなされている[26]。三木は、周知のように、パスカル研究から出発したこともあり、人間学的観点からマルクス主義をとらえて著名となるが、それゆえに「正統派マルクス主義」から批判も受けている[27]。山下の新興教育論が三木的マルクス理解を介してのものであったという点が、どのように彼の発達観に影響を与えたのか、この点は今後の重要な検討課題である。

山下は、成城小学校で数年を過した後、ドイツ・マールブルク大学に留学した。宮崎俊明は、山下のドイツ留学時代の聴講ノートや論文草稿、手紙、手記などを用いながら、当時の彼の学習過程を追っている[28]。その分析の中で注目されているのが、「意識」の構造を図解したメモで、彼の発生論的理解を知る上で重要な手がかりとなる（図１）。山下は意識の構造を説明するために、「此岸」と「彼岸」を上下に置き、前者は可視的・技術的・合理的な世界とする一方で、後者を本質的な世界、即ち無意識的・無時間的で、混沌とした、信仰や愛、心情・感情といった世界として位置づけている。そしてその間には、川の流れのような線が水平に描かれ、それを橋渡しする矢印や通路などが書かれている。さらに興味深いことに、彼は、対比的に、前者の領域にWachstum（成長）、後者にEntwicklung（発達）の語を書き込んでいるのである。この資料の実物を著者は確認しておらず、彼の思想上の思索の展開として今後十分な分析が必要であるが、少なくとも彼が発達概念を人間の

混沌とした無意識の領域に見ていたことがみてとれるのである。ただし、彼がEntwicklungを発達と訳すかどうかは微妙な問題で、これも彼のドイツ語の翻訳作業を検討する中で、明らかにする必要がある課題である。

図1　山下のマールブルク時代のメモ[29]



（3）発達論争

続いて、発達論争の分析に入っていきたい。まず、この論争は、『教材と児童学研究』創刊号の「児童学とは何か」[30]という山下の巻頭論文で、児童学の二つのルーツとして児童の身体研究（ケトレによる児童の身体測定、1835）と「児童の自然性」に基づく教育（主としてペスタロッチ）を挙げたうえで、児童学が教育に役立つような真の科学となるためには「発育しつつある児童を全体として研究する」必要があり、それが「児童に限らず、汎く人類文化の発展に貢献するところ多いであらう」と述べるところから始まる。これを受けて、座談会にて論争が繰り広げられることになる。

座談会では、山下が「新しい人間性の問題」「人間の尊厳性や高貴性」「深い意味において個性の問題」について述べたのに対して、小野嶋右左雄と城戸幡太郎は共に山下を心身二元論から抜け出せない議論ととらえ、彼のいう「意識」に対して「生活」を対置させる。小野島と城戸は、「実践」「生活」「（児童と大人の―引用者）時代的対立」を児童学の出発点に設定し、山下の「尊厳性」に対して児童の提示する「問題性」を主題とするのである。このような児童を社会から発想する論では、そもそも山下が児童を即自的な存在としてとらえていると問題視するのだが、そこに議論のすれ違いがあるように思われる。その一端を検討してみよう。

村上：（児童は次の時代において生活するものであって、その意味で狭い心理学ではなく生活上の問題性から論を立てる児童学が必要であるという――引用者）城戸さんの御意見には全く賛成です。それにしても尚私は児童アンジッヒ所謂自然性、さうしたものが今貴方の話して居られる様なものの基礎として矢張り重要な問題になるんぢやないかと思ひます。

城戸：私から言へば逆ではないかと思ひます。実際の要求を満すための知識の方法としてさう云ふ理論が段々発展させられて行くと思ひます。[31]

山下は、「現象学的な方法」すなわち児童の表現したもの（図画、言葉、行動）を洞察的に連関させ、そこに法則性を見つけることを第一義に考え、それを「自然性」と表現している。山下にすれば、これは批判を受けたような子どもの中に不変的な理想を見るものではなく、現実の生活には現れていない無意識の領域（先のドイツ留学中のメモでいくと「彼岸」に位置づく）にありそれを引き出すことで社会を問い返す、その上で社会を創造していくという過程を想定していたのではないか。

この両者の相違点は、『教材と児童学研究』第二号における波多野完治とのやり取りのなかでいっそうはっきりと現れてくる。波多野は、山下の「児童の主体的方面の規定に急であつて、その環境的側面に就いては全然触れられてゐない（―傍点引用者）」点を不服として、「児童を発育されるものと規定する事は、児童を生物学的に規定する（発育）と共に又これを社会的に規定する所以（される）でもある。」とする[32]。これに対して山下は、当然環境については考慮に入れているとして次のように反論する。

波多野氏のかかる見方の根柢には功利的見解が多分に濃厚である様にも見える。…（自分の場合は――引用者）児童に関する注意の社会的成長との関係がより根本的な契機になつてゐる。換言すれば人間性に対する尊厳性や高貴性の一般的自覚が、文芸復興期及び其後の啓蒙時代よりも一層深まりつつある現代の意識と関係がある。…夫故にこそ吾々はかかる人間性を精神文化の根柢や個性とまた人間的自由の観念とも深く連関せしめて考へる事もできるのである。吾々が如何なる関係に於て児童問題を取上げるにしても、かかる人間性の問題から外れて研究することは出来ない。

このように、山下は1930年代をある意味で最も人間性の深まりが見られる時代と位置付け、だからこそその点を深めなければ児童学は発展しないとするのである。ここから、山下が単純に社会や環境を無視していたとはいえないだろう。山下は「現象学的方法」を提起していると先に述べたが、これは子どもの綴方から直接的に子どもの生活課題をつかむといった生活綴方の方法とは異なり、人類が現在の状況を乗り越えていくための立脚点を子どもの活動の断片の集積の中に見出すということを示していると位置づけられる。それは、いいかえれば人間の発生の起源を子どもの中に探る作業でもある。この点で、山下の発達論は、ドイツ現象学やマルクス主義との対話のなかで、発生

論的視点をもつという性格のものであったと考えられる。

発達をただちに社会と結びつけるのではなく、そこに身体論的契機を導入しようという山下の試みは、当時の論争中では広く理解を得ることはなかった。しかし、当初から発達と発生の断絶を見てきた日本の発達論において、山下によって両者の連結が試みられたことは注目に値する。このような独自の視点がどのように形成されたのか、また近世から近代への過渡期においてontwikkelingを「発生」と訳出した蘭医学者の子どもへのまなざしにまでさかのぼることができるのか、今後の研究で検討していきたい。

1　近年の発達論批判については、前田晶子「明治初期の子育て書における発達概念の使用」『鹿児島大学教育学部研究紀要　教育科学編』第56巻、2005年を参照。
2　今井康雄「見失われた公共性を求めて」『近代教育フォーラム』第5号、1996年。
3　森田尚人「発達観の歴史的再構成」『教育学年報3』世織書房、1994年。
4　前田晶子「江戸後期の医学における子ども認識」『日本の教育史学』第43集、2000年。
5　田中昌人「文明開化期における発達の概念の導入について」『京都大学教育学部紀要』34号、1988年。
6　バーバラ・ドゥーデン『女の皮膚の下』<新版>、井上茂子訳、藤原書店、1994年。
7　三成美保「書評『身体と医療の教育社会史』」『日本史研究』2004年12月。
8　メルロ・ポンティ『知覚の現象学』竹内芳郎訳、みすず書房、1967年。
9　『和英語林集成』は、ヘボンが岸田吟香とともに作成した辞書で、初めての本格的な和英辞書として著名である。俗語や方言なども収録され、5版まで重ねられた。2版で約6000語が追加、3版で約14000語が追加された。
10　柴田昌吉（1842-1901）は、長崎で蘭語、英語を習得し、英語小通詞となる。その後、沼津の海軍兵学校教官を経て外務省勤務となり、『明六雑誌』にも執筆をするなど活躍した。外務省を辞したあとは長崎で柴田英学校を開いた。早川勇『日本の英語辞書と編纂者』春風社、2006年。
11　子安峻（1836-1898）は、美濃国（岐阜県大垣）出身で、漢学から英学に転向してブラウンやヘボンに教示を受ける。1864年に神奈川奉公通詞取締役となり、その後外務省に勤務した。1877年には外務省を辞し、柴田昌吉、本野盛亨とともに活版印刷所「日就社」を創業し、読売新聞を創刊した。
12　前掲『日本の英語辞書と編纂者』。
13　田中昌人「わが国における発達の概念の生成について（1）」『人間発達研究所紀要』第2号、1988年3月。
14　前掲「明治初期の子育て書における発達概念の使用」、224－226頁。
15　Raymond Williams　“A vocabulary of culture and society”　1983.
16　Ibid, pp.142-143
17　森田尚人「ダーウィン進化論と発達概念の転換（上）～（下）」『教育学論集』中央大学教育学研究会、第34、36、42集、1992、1994、2000年、同「近代教育学における発達概念の系譜」『近代教育フォーラム』近代教育思想史研究会、1995年。
18　中内敏夫『中内敏夫著作集Ⅵ　学校改造論争の深層』藤原書店、1999年、169－175頁。
19　高橋智、清水寛『城戸幡太郎と日本の障害者教育科学』多賀出版、1998年、45頁。
20　新興教育研究所（1930年創設）は、日本教育労働者組合（非合法）と共に戦前のマルクス主義教育運動の中心組織として活動を行った機関である。天皇制教学体制のもとで弾圧を受け、最後に残った兵庫支部も1936年にはメンバーが検挙されている。山下は、そこの所長を務め、機関誌『新興教育』の発刊などに尽力した。
21　たとえば井野川潔「山下徳治と新興教育」『近代日本の教育を育てた人びと』東洋館出版社、1965年。
22　前掲「山下徳治と新興教育」1965年、231頁。
23　内島貞雄「山下徳治の子ども認識と教育研究」『教育運動研究』創刊号、1976年7月、65頁。
24　山下徳治『新興ロシアの教育』鐵塔書院、1929年、11頁。
25　前掲『新興ロシアの教育』17頁。
26　前掲「山下徳治の子ども認識と教育研究」67頁。
27　松田道雄『在野の思想家たち』岩波書店、1977年。

28　宮崎俊明「山下徳治にみるドイツ教育学の受容問題」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』第51巻、2000年。
29　前掲「山下徳治にみるドイツ教育学の受容問題」の「山下徳治による病理・思考・教育・葛藤・学問と人間の究明図」（p.81）より転載。なお、宮崎論文には本図を翻訳したものが掲載されている。
30　村上純「児童学とは何か」『教材と児童学研究』創刊号、1934年5月。「村上純」は山下徳治のペンネーム。
31　「「児童学とは何か」の座談会」『教材と児童学研究』第1巻第2号、1934年6月、16頁。
32　波多野完治「児童学に就いて」『教材と児童学研究』1934年7月。